



ASLE-Japan / 文学・環境学会

NEWSLETTER

The Association for the Study of Literature and Environment in Japan

June 30, 2020, No. 48

【役員名簿 (2020年6月現在)】(五十音順)

代表: 結城 正美 (青山学院大学)
副代表: 小谷 一明 (新潟県立大学)
顧問: 上遠 恵子 (レイチェル・カーソン日本協会)
 西村 頼男 (阪南大学名誉教授)
事務局長: 辻 和彦 (近畿大学)
事務局補佐: 日野原 慶 (大東文化大学)
 山田 悠介 (大東文化大学)
会計: 河野 千絵 (日本大学・非)
 浜本 隆三 (甲南大学)
監事: 村上 清敏 (金沢大学名誉教授)

ニューズレター編集委員:

笠間 悠貴 (明治大学・院)
 澤田 由紀子 (甲南大学・非)
 菅井 大地 (松山大学)

会誌編集委員:

相原 優子 (武蔵野美術大学)
 樋口 大祐 (神戸大学)
 平塚 博子 (日本大学)
 Bruce Allen (清泉女子大学)
 松岡 幸司 (信州大学)

コンピューターセンター:

岩政 伸治 (白百合女子大学)
 北国 伸隆
 高橋 実沙子 (聖心女子大学・非)
 山城 新 (琉球大学)

評議員:

浅井 千晶 (千里金蘭大学)
 太田 雅孝 (大東文化大学)
 大野 美砂 (東京海洋大学)
 上岡 克己 (高知大学名誉教授)
 黒崎 真由美 (関東学院大学)
 塩田 弘 (広島修道大学)
 塩塚 秀一郎 (東京大学)
 John Rippey (滋賀県立大学)
 管 啓次郎 (明治大学)
 高橋 綾子 (長岡技術科学大学)
 高橋 龍夫 (専修大学)
 高橋 勤 (九州大学)
 高橋 昌子
 巽 孝之 (慶応義塾大学)
 豊里 真弓 (札幌大学)
 中川 僚子 (聖心女子大学)
 芳賀 浩一 (城西国際大学)
 波戸岡 景太 (明治大学)

林 直生 (滋賀大学)
 横田 由理 (大東文化大学・非)
院生代表: 江川 あゆみ (早稲田大学・院)

広報:

喜納 育江 (琉球大学)
 塚田 幸光 (関西学院大学)
 松永 京子 (神戸市外国語大学)

研究助成:

岡島 成行 (青森山田学園)
 管 啓次郎 (明治大学)
 乳井 昌史 (早稲田大学)
 野田 研一 (立教大学名誉教授)
 山里 勝己 (名桜大学)
 結城 正美 (代表)

高田賢一さんを想う

野田 研一 (立教大学名誉教授)

2020年4月17日、本学会の副代表を務められました、高田賢一先生がお亡くなりになりました。ゆかりの深い野田研一先生に、追悼のお言葉を寄せて頂きました。



急逝の知らせが中村邦生さんから届きました。青山学院大学ご退職後、辛い闘病生活を続けておられることを耳にしては、高田さん特有の微笑と低いふくらみのある声が甦ってきました。耳に心地よい、いい声の持ち主でした。大学院の先輩でした。5歳年長でしたから、高田賢一という気鋭のアメリカ文学研究者はつねに殿上人。お目にかかる機会もなく、ただ学友を介しての噂話が聞こえてくるそんな存在でした。

しかし、1990年秋、初めてお目にかかる機会を得ました。ある論文集の企画で、私の論文を読んで下さり、アメリカ文学学会の会場で会いましょうとの連絡をいただきました。何せ面識がありませんから、どの人が高田さんか判別はできません。幸い、知っている人に高田さんのことを話すと、「ほら、あそこにいるよ」と教えてもらいました。当時私は40歳でしたから、高田さんは45歳。30年も前の話ですね。思えばお互いに若かったのですが、高田さんは遙か先に行く人のイメージでした。

そのときどんな話をしたのか、何も覚えていません。ただ、私がお送りした論文についてコメントをいただいたのだと思います。以降、出版企画があると誘いがかかるようになり、そのたびに「あの高田賢一氏」と一緒に仕事ができることの有り難さを身にしみて感じるようになりました。

端的に言いましょう。高田さんはまず何よりも「本を売る」ことをつねに念頭に置いて企画を遂行する人でした。出版社と編集者に迷惑をかけないこと。そのためには「売れる」あるいは「売る」必要があること。研究者の「道楽」や「独りよがり」であってはならないこと。そのための人選はきわめてシビアで絶妙でした。もう一つの視点は、地味ながら能力のある人、まだその能力が充分認知されていない若手や無名の研究者を意識的に起用すること。アメリカ文学関係の若手研究者が高田さんのいろいろな企画に携わるようになったのは彼のじつに注意深いアンテナのおかげです。

この二つの原則のうち、第一の「売る」原則。これは私がもっとも苦手とするところで、高田さんに甘えっぱなしでした。なんとなれば、高田さんがいつもその欠落をカバーして下さったからです。いつだったか、高田さんが病に倒れられた頃、自分がそれまでずっと「売る」ことを考えずに済んだのは高田さんのおかげだったことに胸を衝かれる思いをしたことがありました。何という迂闊。そして不遜。こういうとき高田さんならこんなふうを考え、手配するのだろうと想像し、覚束ないながらも真似てみたこともあります。もちろん真似などおそれとはできません。ただ、第二の原則についてはつねに意識してきたつもりです。

高田さんは意図的に一見目立たない立場で仕事をされる人でした。他者を支えることを価値観の基底に置いた人柄だったのだと思います。だから高田さんの息のかかった仕事は、彼の研究業績の背後に堆く積もっているのですが一見すると見えにくいものです。いま、初期の ASLE-Japan と高田さんのかかわりの一端を思い出します。

高田さんは ASLE-Japan 発足時より 2 期にわたって副代表を務めておられます。これはまさに ASLE-Japan 発展の支えとなることを考えて下さったものです。じっさい、そういう役割をつねに果たして下さいました。何せ代表となったのが私ですから、頼りない代表を支える役割を高田さんが担って下さったことは明らかです。当時は副代表 2 名体制で、もうお一方は大神田丈二さんでした。

さて、初期 ASLE-Japan にとって最大のイベントと言っているのが、ハワイ大学で開催された「日米環境文学シンポジウム」(1996 年 8 月 13 日～17 日)であったことをご存知の方も多と思います。^注 ASLE-US と ASLE-Japan の合同イベントで、日米双方から招待作家・詩人とそれぞれの代表的メンバーが一堂に会した会議でした。ただ、あまり知られていないと思いますが、この国際シンポジウムの費用はトヨタ自動車の支援によるものでした。アメリカ側からはほとんど出資されていません。

そしてトヨタ自動車との交渉に尽力されたのが、当時読売新聞社におられた岡島成行さんと高田賢一さんです。当時、私の職場は金沢大学でしたので、東京で行われる交渉の場にはほとんど立ち会っていません。代わってその場に赴いて下さったのが高田さんです。どれくらいの回数、交渉の場に向かわれたのか、今と

なっては岡島さんにうかがうほかありませんが、いずれにせよ、お二人の尽力により「クラウン 1 台分」と言われた資金が用意されました。

代表たる私はその間、何をしていたかと言いますと、アメリカ側との交渉に明け暮れていました。当時は e-mail が本格化する以前でしたから、基本的な連絡はファックスと電話と手紙でした。アメリカ側はスコット・スロヴィック氏が招待作家・詩人の人選から参加者の確定に当たり、ハワイ大学のフランク・スチュアート氏が会場や宿泊の手配、そして日本側では予算立て、支払い、送金のほか招待作家と参加者の確定などの作業を進めました。当時、ネヴァダ大学大学院への留学を目前に控えていた結城正美さんにも大いに助けていただきました。

あんまり頻繁な国際電話とファックスでしたので、学部長から使い過ぎだと注意を受けるほどでしたが、何はともあれ、日野啓三さんと石牟礼道子さんにおいていただいた記念すべき「日米環境文学シンポジウム」は成功裡に幕を閉じました。参加して下さいました ASLE-Japan メンバーの皆さんにもほんとうにお世話になりました。

しかし、私がほんとうに書きたいのはここから先のことです。このシンポジウムのためにトヨタ自動車から提供していただいた資金ですが、高田さんは私に可能な限り使い切らないよう、余らせるよう助言を下さいました。なぜなら、当時の ASLE-Japan はまだ学会誌を発行していなかったからです。余らせた分を将来の学会誌発行の基金にすることを高田さんは考えておられたのです。もちろん、私も学会誌刊行の必要性は切実に感じていましたが、会費だけでは雑誌刊行にはたり着けないと半ば諦めかけていました。

これが高田賢一さんの発想のすごさです。その後、ASLE-Japan は英字新聞 *The Daily Yomiuri* のトヨタ自動車の広告を、ネイチャーライティングを使って制作するという画期的な仕事もしました。この数回分の原稿料も、高田さんと相談して、執筆者にではなく学会としていただくという方法を採用し、やはり学会誌刊行の基金に振り替えました。ちょうどこの 3 月下旬、必要があって自分の部屋を片づけていましたところ、このときの広告ファイルが見つかり、懐かしく眺めておりました。

いま、ASLE-Japan は立派な学会誌を有し、優れた論考が着実に発表されています。それを目にするたびに、高田賢一という傑出した研究者の、論文や著書にはけっして表れない別の顔を思い出します。場所を用意し、機会を用意し、具体策を考え、打開案を考え、なのにご自分は後ろに控え、名前だけ残すなど不名誉だといわんばかり。もはや、高田さんの聲に接することは叶いませんが、代わりに論文の文章にその〈声〉を聴きとることができます。あの低い、ふくらみのある、ときに静かすぎて聴きとりにくいこともあった〈声〉。高田賢一さん、有り難うございました。感謝と涙あるのみです。

(注) この国際シンポジウムの詳細な報告は、ニューズレター 第 5 号 (1997 年) をご覧下さい。

高田賢一先生 業績一覧 (1990 年以降)

<ul style="list-style-type: none"> ・板橋 好枝, 高田賢一『はじめて学ぶアメリカ文学史』ミネルヴァ書房, 1991 年 5 月 ・高田賢一, 野田研一, 笹田直人『たのしく読めるアメリカ文学 作品ガイド 150』ミネルヴァ書房, 1994 年 2 月 ・「現代アメリカン・ネイチャーライティング・アンソロジー アポロギア / バリー・ロペス」 「アメリカン・ネイチャーライティング・ブックガイド 30」『ユリイカ 1996 年 3 月号』青土社, 1996 年 3 月 ・久守 和子, 中村 邦生, 高田 賢一『英米文学にみる家族像—関係の幻想』ミネルヴァ書房, 1997 年 1 月 ・「飛翔と転落 シャーウッド・アンダスン論」 『アメリカ文学の冒険—空間の想像力』原川恭一(編), 彩流社, 1998 年 3 月 ・高田賢一, 森岡裕一(編著)『シャーウッド・アンダソンの文学—現代アメリカ小説の原点』ミネルヴァ書房, 1999 年 6 月 ・文学・環境学会編『たのしく読めるネイチャーライティング』ミネルヴァ書房, 2000 年 ・板橋好枝, 高田賢一(編著)『アメリカ小説の変容—多文化時代への序奏』ミネルヴァ書房, 2000 年 3 月 ・『アメリカ文学のなかの子どもたち—絵本から小説まで』ミネルヴァ書房, 2004 年 3 月 ・「トポスの諸相 動物との出会いを求めて」『越境するトポス : 環境文学論序説』野田研一, 結城正美(編), 彩流社, 2004 年 7 月 ・「アメリカ児童文学と自然」『自然と文学のダイアログ—国際シンポジウム沖縄 2003 都市・田園・野生』山里勝己, 高田賢一, 野田研一, 高橋勤, スコット・スロヴィック(編), 彩流社, 2004 年 9 月 ・「ソローとネイチャーライティングの系譜」 『STUDIO VOICE』第 350 号, 2005 年 	<ul style="list-style-type: none"> ・「自然へのまなざし」『英米児童文学の黄金時代—子どもの本の万華鏡』ミネルヴァ書房, 2005 年 4 月 ・「20 世紀アメリカ児童文学における子ども像と環境意識の変容(1)」『英文学思潮』第 79 巻, 青山学院大学英文学会, 2006 年 ・高田賢一(編著)『若草物語—シリーズもっと知りたい名作の世界 1』ミネルヴァ書房, 2006 年 2 月 ・木下卓, 窪田憲子, 高田賢一, 野田研一, 久守和子『英語文学事典』ミネルヴァ書房, 2007 年 4 月 ・「20 世紀アメリカ児童文学における子ども像と環境意識の変容(2)」『英文学思潮』第 80 巻, 青山学院大学英文学会, 2007 年 ・「動物物語の現代的意義と可能性」『人間と動物をめぐるメタファー』白百合女子大学言語・文学研究センター編, 朝日由紀子責任編集, 弘学社, 2008 年 12 月 ・「自然へのまなざし」『赤毛のアン—シリーズもっと知りたい名作の世界 10』ミネルヴァ書房, 2008 年 6 月 ・「旅する子どもたち—児童文学と場所」『〈移動〉のアメリカ文化学』山里勝己(編著), ミネルヴァ書房, 2011 年 3 月 ・「多文化主義と動物物語の可能性」『「児童文学講座」講演集 2010 年度』立教女学院短期大学図書館, 2011 年 3 月 ・「動物物語と家族」『子どもの世紀 = The Centuries of Childhood and Family in the West : 表現された子どもと家族像』神宮輝夫, 高田賢一, 北本正章(編著), ミネルヴァ書房, 2013 年 7 月 ・「不思議の国のゴリウオグ」『〈日本幻想〉表象と反表象の比較文化論 = Visionary Japan: Comparative Approaches to the Representation and Counter-Representation of Culture』野田研一(編著), ミネルヴァ書房, 2015 年 3 月
--	--

※高田先生のお写真は、ご遺族からご提供頂きました。謹んで感謝の意を表したいと存じます。

【ASLE-Japan 例会報告】

2019年度12月例会報告
Ursula Heise 先生講演『人新世とエコクリティシズム』

清水 美貴

2019年12月18日明治大学駿河台キャンパスにおいて行われたASLE-Japan 例会では、カリフォルニア大学ロサンゼルス校より Ursula K. Heise 教授をお招きし「人新世とエコクリティシズム」をテーマにご講演いただいた。この講演では、この十数年においてあらゆる分野で盛んに研究が進められている人新世の概念的枠組みを提示し、またそれらをめぐる議論の変遷を整理したうえで、環境問題のなかでもとりわけ人新世の文脈で語られることの多い気候変動に関する文学「Climate Fiction」を分析対象とし、語りや比喩的手法を検討しつつ文学的想像力によって



捉えられた人新世について議論された。

人新世は、正式に認められてはいないものの、完新世にかわる地質年代として人類の活動が地球規模でかつ長期的に影響を与え環境を変容させてしまっている時代とされる。人新世をめぐっては、自然環境に及ぼす人間の能力を過大に評価し、科学技術によって自然を作り変えていけるといった楽観的な見方があること、また人類を

一括りにすることで環境問題の原因とその被害の地域差が無視されているという議論があることなどが紹介された。一方、文学においては、気候変動のような地球規模かつ長期的現象を文学が表象しうるか、という問題に対し懐疑的な見方があることを指摘しつつ、Heise氏は気候変動を扱う新しい文学ジャンルである Cli-Fi (Climate Fiction) に着目し、気候変動によって変わりゆく地球がどのように想像され描かれるのかを検討された。

Heise氏はCli-Fiの語りの形式について大まかな3つの分類——大災害を描きながら比較的楽観的な結末に至る Climate Disaster Story、人口爆発や差別といった社会問題をからめとりながらより大規模な気候変動による自然の荒廃を描く Climate Dystopia、そして登場人物の個人的な喪失の物語に焦点を当てることで背景にある気候変動による環境の悪化を描く Climate Proxy Story——を提示し、Cli-Fiの特徴を示した。

本講演では、洪水や都市の水没といった文学作品においてはありふれたテーマを気候変動の文脈の中で、温暖化に伴う洪水や海面の上昇の物語として語り直す2つの作品 Nghiem-Minh Nguyen-Vo 監督の映画 *NOUC2030* (2014)、Kim Stanley Robinson の小説 *New York 2140*

(2017) を分析対象とし、水に沈んだ未来の世界を極端に悲観的にも楽観的にもならず有り得べき未来として想像し表現する映像的手法、文学的手法が検討された。気候変動により沈みゆく海辺の街を舞台にした *NOUC2030* においては、水没するはずのないサイゴンの街が海に沈む美しくも奇妙で幻想的な場面に言及し、気候変動を経た世界においては自然や現実性が不確実で不安定であることや、海面上昇により海の一部になってしまった登場人物の土地などに触れ、土地の所有権の問題があぶりだされていることなどが指摘された。また *New York 2140* においては海面上昇によって水没したニューヨークがヴェニスのような街として描かれており、決してネガティブに偏った表現がされていないことに言及しつつ、「沈む」「溺れる」といった言葉が多様かつ頻繁に使用されている点をあげ、物理的な水没を意味するだけではなく、比喩として市場経済や土地、財産といった様々なものに対する既存の価値を揺さぶっていることなどが指摘された。

気候変動の行く末は単なる自然環境の悪化ではなく、今回議論された作品に示唆されているように、環境の荒廃に伴う権利や市場経済などの既存の社会システムの行き詰まりでもあり、これから社会がいかに適応してゆくのかが課題のひとつであると感じた。社会の仕組みや法律が人間だけの閉ざされた世界を前提に作られている限り、行き詰まりの末に破綻を免れないのではないのか。*New York 2140* で描かれるニューヨークの街には、水とともに生物多様性が戻ってくるという。ニューヨークのような大都市に象徴される人間社会と野生の境界が揺るがされている点で、この作品はこれからの社会のあり方や自然との関係を模索するうえで希望的な示唆に富んでいるように感じる。今回の講演を聞きながら、人新世に文学的にアプローチしていくことの重要性を改めて感じ、日本における議論の発展に注目していきたいと思った。



【ASLE 例会報告】

2020年5月オンライン例会報告

『映画 水の記憶 土の記憶～南相馬から』オンライン上映会
＋ トークセッション 赤坂 友昭氏・古木 洋平氏・管 啓次郎氏

松尾 理絵（明治大学・院）、杉山 和孝（山梨学院大学）

5月30日（土）、赤坂友昭（写真家）、古木洋平（映画監督）、管啓次郎（明治大学）をゲストに迎え、オンライン・トーク・セッションを開催した。映画『水の記憶 土の記憶～南相馬から』（2016年）を事前視聴して臨む形式であり海外参加も可能となった。

これは監督に古木、プロデューサーに赤坂、脚本とナレーションに管という少人数のクルーと南相馬市との共同製作によるドキュメンタリー短編映画である。

東京電力福島第一原発事故後に強制避難区域となり人の入れない地となった南相馬に自然はどのように還ってくるのか。まず湿地が再生しフジツボや水鳥たちが戻る。さらに南相馬に戻りくる人々の姿も鮮明に記録されている。若い頃から農業を営んできた根本さんは「土があり、生きものがあり、そして人間が活着している」と語る。再び畑を耕せる喜びだけではなく様々な思いが凝縮されたずっしりと重い言葉だった。大年神を祀る山田神社再建に際し、氏子総代長の担野さん、宮司の森さんは「ここが復興再生の象徴となり、人々に勇気や希望を与えてくれる場となれば」と受け継ぐ未来の人々を想像しながら熱く語っていた。トークでは、写真や取材時の貴重な裏話とともに「準絶滅危惧種だった花ミズアオイの群生が半世紀ぶりに出現した」との貴重な話もとび出した。

この映画はまた『あたらしい野生の地—リワイディング』（2016年日本公開）と強く結びついており、赤坂と管のアラスカへの旅と地続きだという。「再野生化（rewilding）」とは、人間活動が断ち切られたとき、どのように本来の動植物相が回復されるかを表した言葉である。今回は南相馬の再野生化そして戻りくる人の冬の記録だったが、当初から一年の巡りを撮影する構想があったようだ。

COVID-19をめぐり混乱の最中、世界のあらゆる場所で再野生化している様子が報道されている。人がどのように自然とかかわり生きていくのか、まさに再考すべきときであり、あらためて続編を切望する。
（松尾 理絵）

昨年末に入会した私にとって今回の例会がASLE-Japan初めての会合であり、ASLE-JapanにとてもCOVID-19に対応した初めてのZoomを使っ

た例会だった。午後2時、震災から5年経った避難指示解除前の福島県南相馬市を記録した映画、『水の記憶 土の記憶 -南相馬から-』の製作者の方々——企画・製作を担当した赤坂友昭氏、脚本・監修の管啓次郎氏、そして古木洋平監督——によるトークセッションが始まった。

セッションではまず、“Rewilding”が本作の重要なテーマの一つとして挙げられた。人間の土地から人々が居なくなった時、その場所には生き物たちが帰って来る。人間が残した無機物を飲み込むようにして起きる“Rewilding”は、生命の圧倒的な力を私たちに示してくれる。それは「絶望を希望に変える変換装置」であると赤坂氏は言う。しかし菅氏が語ったように“Rewilding”された場所は非常に脆弱でもある。震災とともに帰ってきたたくさんの水鳥たちは、南相馬市の復興が進むにつれてどこへともなく消えてゆく。そこには自然と共に生きる人間の根源的なジレンマがある。

続いて“Rewilding”が時間の感覚に結び付けられた。自然の再帰とは循環する時間、すなわち円環の時間のスケールでもあり、それが近代の人間主義の直線的な時間と対比される。水は川から海へ流れ、そして雨となってまた川に帰ってくる。そして土地を豊かにし、土地は生と死を繰り返すことで命を循環させる場所となる。この循環が水の記憶と土の記憶として堆積してゆく。これらの運動を捉えることで映画は、私たちが個人の時間を越えたところで流れている循環の一部であることを思い出させる。

懇親会の後、もう一度映画を見た。人々の声に混じって映像とともに流れる無数の音が、人間には読み解くことができない声のように聞こえる。古木監督が最後に触れていたエンドロールとともに流れる波の音が、アンビエントなものとして前景化される。震災と共に現れ、復興とともに消えてゆくその声は、デリダが言うところの亡霊のものである。半世紀ぶりに南相馬に姿を現した準絶滅危惧種であるミズアオイはまさに亡霊的な存在であり、その意味でこの映画は瓦礫の山から再び整備された人間の街の復興の記録であると同時に、私たちが普段忘れてしまっているが実際に共に生きている亡霊の記録なのではないだろうか。

（杉山 和孝）

【ASLE-J GRAD Journal (院生組織だより)】

フィンランド滞在記

青田 麻未 (日本学術振興会特別研究員)

大学の春休みを利用して、2020年1月から3月まで、フィンランドのヘルシンキ大学に客員研究員として滞在した。2年前の夏に学会参加のため同じくヘルシンキを訪れた際の、夜22時を過ぎても日の沈まない世界の印象は忘れがたい。しかし今回は冬の滞りで、到着してすぐのころは日の短さを如実に感じたものだ。朝8時を過ぎてもまだ外は暗く、それでも小鳥が囀りはじめる。しかし目には夜、耳には朝という奇妙な時間感覚にもすぐに慣れてしまった。

フィンランドは、私が専門とする環境美学・日常美学の研究がいまもっとも盛んな国の一つである。この分野自体は北米、イギリスといった英語圏から始まったものだが、現在では世界中に広がっている。森や湖といった自然環境の豊かさ、デザイン産業の強さから生じる日常への鋭い感覚といった事情から、フィンランドでこれらの分野が盛り上がりを見せるのは必然であったとも言えるかもしれない。私はヘルシンキ大学のアルト・ハーパラ教授のもとに滞在し、彼が開いている美学ゼミに継続的に参加したが、多くの学生が両分野についての研究を進めている様子だった。

また、私の滞在をコーディネートしてくださったサンナ・レーチネンさんは、環境美学研究で博士号を取得後、ヘルシンキ大学に属するサステナビリティ科学研究所(HELSUS)でポストドクとして研究に従事されている。美学を修めた人物が、その後のキャリアパスとして学際性ある機関でポストについているということも、フィンランドが多角的に環境問題へ向き合おうとしていることを示す事実であるように思われる。今回の滞在は、美学を内側から学び直すだけでなく、美学をその外側の学問とどのように関連させていくのかということも考えさせられるものとなった。

しかし滞在中にもっとも印象的だったのは、「きれいな雪景色を見せられなくて残念だ」と、会う人みな口を揃えたように言っていたことである。今年のフィンランドは記録的な暖冬で、首都ヘルシンキには雪もほとんど降らなかった。東京育ちで寒さには慣れていない私でも、分厚いジャケットにスノーブーツという装備でヘルシンキを歩いていると、汗ばんでしまうことが少なくなかった。

もちろんこの暖冬の原因は地球温暖化である、と即座に断言することは危険だろうし、専門家ではない私には判断がつかない部分もある。しかし雪がないということ、目に見えて分かる冬がそこにはないということは、ヘルシンキの人々にとって重要な意味を持っていたように思われる。実際、ヘルシンキ大学では地球温暖化を中心とする環境問題に関するイベントが多く行われていて、私もそのうちの一つに足を運んでみた。そのイベントはThink Corner という、ヘルシンキ大学が運営する市民にも開かれた学術討論のためのスペースで開催されたもので、地球温暖化に対して大学は何ができるか?がテーマとなっていた。はじめに気象学を専門とする教員から地球温暖化に関するレクチャーがあったあと、環境活動家として若者の啓発に努めている学生、ヘルシンキ大学が地球温暖化に対してどのような対策を講じているかをレクチャーする教員が登壇した。大学の取り組みにはクリーンエネルギーを利用した発電やキャンパスの緑化、市民に対する情報提供、専門研究機関の設立などさまざまなものがあり、私はそれを純粋に感心して聴いていた。しかし、質疑応答で手を挙げたヘルシンキ大学の学生が、このレクチャーに対して鋭い意見を投げかける。彼女はこれらの取り組みは大学の宣伝として機能するばかりで、実際に地球温暖化を食い止めるためのアクションにはなっていないと指摘する。本当に世界を変えるために、大学はいったい何をしているのかと彼女は問いかけるのだ。

私は当初、4月3日の飛行機で日本に帰る予定でいた。しかし3月中旬になると、COVID-19の影響がフィンランドにも大きく出始めた。予定を2週間早め、慌ただしくかの地をあとにして帰国すると、美学ゼミに参加しているヘルシンキ大学の学生から博士論文に向けた研究計画書が送られてきた。なんとそこには「COVID-19のもとでの環境美学」という章がすでに組み込まれていたのである。この瞬発力。環境人文学をやっていくということは、地球温暖化にせよウイルス伝播の問題にせよ、私たちの世界をがらりと変えてしまうものに素早く反応し、しかし同時にゆっくりと思考する技を身につけることなのだと、今回の滞在を通して学んだ。

院生組織 代表交替にかかるご挨拶と最近の活動報告

江川 あゆみ (早稲田大学・院)

前年末に院生組織の代表に就任致しました、江川あゆみです。前代表の笠間悠貴さんが非常に活発で協力的な組織づくりをしてくださったおかげで、メンバーにとっても恵まれているなど感じています。わたしは修士課程で野田研一先生のゼミ生だったこともあり、同じく野田先生から薫陶を受けられた山本洋平さんや山田悠介さんが務められた院生組織の代表を引き継ぐことに感慨深い思いもあります。今後とも会員みなさんのご協力を得ながら、大学院生・若手研究者の研鑽の場として、維持していけるよう努めて参ります。みなさんに研究会のスーパーバイザーをお願いすることがあるかもしれません。その時はどうぞお付き合いください!

さて、以下では昨夏の全国大会以後の活動報告をします。大会後

3度、首都圏在住のメンバーを中心に研究会をおこないました。また、3月には院生組織のメンバーである伊東弘樹さんにご尽力いただき、赤坂憲雄先生をお招きして、ご著書『性食考』に関する研究会を実施する予定でした。会は6月現在延期となっていますが、このような貴重な機会を得られる境遇であることを、メンバー一同非常にありがたく思っています。

院生組織では今後も継続的に研究会をおこなう予定です(オンライン実施も考えています)。ご関心を持たれた方はASLE-Japanのウェブサイト、About Us ページからご連絡ください。また、活動報告はブログ (<http://aslej.blogspot.com/>) でもおこなっています。どうぞご笑覧ください。

【学会報告】

The 2019 Research Institute for Interdisciplinary Medical Humanities in the Age of the Anthropocene (2019年6月、於 台湾・淡江大学) 報告

森田 系太郎 (立教大学・兼任講師)

2019年6月23日。約10年ぶりに、台湾のエコクリティシズムの中心地である淡江大学のキャンパスを訪れていた。目的は、翌日から3日間に渡って開催される“The 2019 Research Institute for Interdisciplinary Medical Humanities in the Age of the Anthropocene”に参加すること。学会の存在はASLE-Japanのメーリングリストで知った。コロナ禍の今、飛行機に乗って自由に移動できたのが夢のように思える。

招聘された基調講演者は3人で、それぞれに3日間のうちの1日が割り当てられた。1日の流れは、①基調講演者による発表 ②台湾を中心とした研究者による研究発表 ③課題論文について参加者同士で議論する Breakout Session ④再び基調講演者による発表 という順であった。

1日目の基調講演者は、米オクラホマ大学の Ronald Schleifer 氏 (George Lynn Cross Research Professor of English, Adjunct Professor in the College of Medicine)。午前の基調講演のタイトルは“Practical Reasoning: How the Experience of the Humanities Can Help Train Doctors”であった。発表原稿によると、医療人文学 (Medical Humanities ; Health Humanities とも言う) は“interdisciplinary studies and teaching that draw upon the creative and intellectual work of disciplines outside of biomedicine to contribute to the education of physicians and healthcare workers”と定義される。その射程には文学研究、歴史研究、芸術研究、哲学に加え、人類学、文化研究、社会学といった社会科学も含む。これは環境人文学の射程と重なるものである。

氏は、医学部志望の学部生、医学生、医師を含む医療従事者を対象に、患者が発するナラティブの理解促進を目的とした“Literature and Medicine”というコースを教えている。一例として、モリスンの小説 *Beloved* が年配のアフリカ系アメリカ人患者との繋がりを構築するのに役立った、というケースが挙げられた。この事実は、私を含め、環境(人)文学研究者を勇気づけるものである。というのも、われわれは、(人)文学の立場から実学としての環境(科学)にどのように貢献できるのか、常に問われてきたからである。

一方、午後の発表“Teaching Sherlock Holmes and Ernest Hemingway to Medical Students”では、“The Resident Patient” (ドイツ)、“Indian Camp”“Hills Like

White Elephants” (ヘミングウェイ)、“The Murders in the Rue Morgue” (ポー) といった作品が取り上げられた。

2日目の基調講演者は、英リーズ大学の Stuart Murray 氏 (Professor of Contemporary Literatures and Film, Director of the Leeds Centre for Medical Humanities)。午前の基調講演は“Critical Methodologies in the Medical Humanities”、午後は“Medical Humanities and Disability: Contexts and Critiques”であった。Schleifer 氏と同様、文学は、他者が抱える苦悩に対する想像力を医学生に育む際に有用であることが示唆された。

Murray 氏の関心分野の1つはポストヒューマンであり、また講演の中でも narrative や bioethical、intraspecies/transspecies、cripistemology (障がい認識論) といった単語が登場しており、環境(人)文学との接点があることを感じさせた。

3日目の基調講演者は、英ノッティンガム大学の Heike Bartel 氏 (Associate Professor in German Studies, Faculty of Arts in the School of Cultures, Languages and Area Studies)。午前の発表は“Re-Evaluating Narratives of Illness and Recovery: Writings on Male Eating Disorders”であった。彼女は、男性摂食障がい者の回復に詩を使ったアプローチを採用しており、そのプロジェクトの一部が紹介された。「食」は環境文学のテーマの1つであり、ここでも両者に接点があることが分かる。

午後の講演“New Directions for the Future of Health Humanities”では、オーストリアの前衛詩人であるエルンスト・ヤンドルの“Being Fifth”という詩を使ってポエトリー・リーディングが行われた。この詩は患者が医師の診察に向かう場面を描いたもので、各国の参加者がそれぞれの第一言語に翻訳し互いに読み合う、という試みとなった。私も日本語代表として参画させてもらった。また最後に、医療人文学の将来の方向性として、国際的ネットワークを通じた領域全体の底上げ、領域の横断・架橋、多様なステークホルダーの関与、社会変革への貢献、クリエイティブなアプローチ、などが示された。

私は製薬業界の通翻訳を生業としているが、そのおかげでドイツ出身イギリス在住の Heike 氏とは個人的に親しくなることができた。というのも、彼女は、文学のみならず、翻訳も専門としているか

らである。グローバルなネットワークが構築できるのも国際学会の醍醐味の1つであることは言うまでもない。¹

ところで初日の Schleifer 氏は、2014 年に *Pain and Suffering* という本を上梓されている。同書において痛み *pain* と苦しみ *suffering* を感じる対象は人間 *human* であるが、これを環境 *non-human* に応用すれば、環境が痛みと苦しみを感じるのが環境破壊であり、環境がケアされたときにそれは環境保護となる。このように考えると、環境(人)文学研究で「痛み」「苦しみ」「ケア」といった医療言語を使用するのは必至となり、ここに再び、環境(人)文学と医療人文学との交差点が見いだせる。

そこで提案がある。環境文学を医療人文学のキーワードである「痛み」「苦しみ」「ケア」、また「障がい」等で読み直してみたらどうだろうか。スコット・スロビック氏は 2017 年の時点ですでに闘病記の環境批評が行われていることに言及しているが、² 日本の環境文学に限定しても、石牟礼道子の『苦界浄土』は言うまでもなく、梨木香歩の近著『椿宿の辺りに』などもよい対象となるだろう。実際に、『椿宿

の辺りに』は環境被害を小説のテーマの1つとしているが、中江有里(2019)に言わせると、「物語をけん引するのは痛み」³なのである。

環境学習の大家で、*ecological identity* を概念化した Michell Thomashow は、今回の COVID-19 のパンデミックと環境学習との接続を試みている。⁴ 環境(人)文学も医療人文学の視点を取り入れる時が来ているのかも知れない。

¹ Heike 氏からは会議後、医療人文学に関して下記の情報を教えてもらった：

・ International Health Humanities Network (IHHN) :

<http://www.healthhumanities.org/>

・ 第9回国際ヘルスヒューマニティーズ学会 (2020年10月23-26日、於・聖路加国際大学) :

<https://confit.atlas.jp/guide/ihhc2020/top>

² スロビック, S.・森田系太郎・山本洋平(2017)『インタビュー『二五年後』のエコクリティシズム』野田研一・山本洋平・森田系太郎(編著)『環境人文学II 他者としての自然』(287-332頁), 勉誠出版, 298頁.

³ 中江有里(2019.6.29)「[書評] 椿宿の辺りに 痛みに導かれ過去たゆたう」『日本経済新聞』朝刊, 28頁.

⁴ Thomashow, M. (2020). Environmental learning and COVID-19. *Terrain.org*. Retrieved May 10, 2020, from <https://www.terrain.org/2020/currents/environmental-learning-and-covid-19/>

【イベント報告】

シンポジウム「動物のいのち 2」(於 明治大学, 2019年11月30日)

江川 あゆみ (早稲田大学・院)

シンポジウム「動物のいのち 2」は、全身白く塗られた赤い禪一丁の舞踏家が強烈なインパクトを与えた。今貂子氏の舞踏パフォーマンスだ。舞踏といっても軽やかに舞うわけではない。はじめ、背中を向けていたのが、身体を強張らせ、振らせながら、少しずつ向きなおっていく。背後では謡曲「井筒」のアレンジが流れる。抑制と衝動が交錯する姿態はいかにも不自由だ。白粉で覆われた／露わになった身体は性差や個我を曖昧にする。「個」により社会化／都市化された身体が解きほぐされ、身体の内側から生命が露出してくる。謡曲を通じて能の世界を漂う精霊すら呼び込む。身体をもって、森羅万象と交感する、「生命の舞踏」とでも呼ぶべきだろうか。やがて1回転し、15分のパフォーマンスが終わる。抑制と衝動のあわいで得体の知れぬ生命の蠢く姿に、しばし目を瞠った。

シンポジウムを貫くのは「ヒトは他の動物たちに何を負っているのか?」という問いであった。登壇者は14人。ひとり15分の濃密なショートプレゼンテーションは形式などなく、それぞれの思うやり方で、この問いに接近していた。ASLE-Japan 前代表の管啓次郎先生が主催され、現代表の結城正美先生が登壇されていたこともあり、会場には ASLE 会員の姿が複数見られた。

さて、「ヒトは他の動物たちに何を負っているのか?」という問いを念頭に「動物のいのち 2」を振り返ると、動物のいのちとの倫理の結びかたに対し大きく2つの方向が示されていたように思う。人間と動物の境界を揺さぶ

ることと、動物のいのちをフィールドで抽象化なく問うことだ。どちらも動物を周縁に追いやり発展してきた人間文化の再考を迫る。

人間と動物の境界を揺さぶることとは、例えば、先に述べた今氏の舞踏のほか、自身を台湾人と日本人の「純粋な雑種」と呼び、「人間」であることを逆照射した作家温又柔氏の「純粋雑種宣言」、身体のプロミティブな部分を動かし、その時に鳴る音(ときに動物的にも聞こえる音)を、声を通して表現した声のアーティスト山崎阿弥氏のパフォーマンスなどに見ることができる。動物のいのちをフィールドで抽象化なく問うこととは、飼猫の臨終の淵を克明に描き出した建築史家松田法子氏の筆致や、「ハシリカッコウがヒゲイノシシを助けた」という狩猟採集民プナンの狩猟における言語世界を語る文化人類学者の奥野克巳氏のプレゼンテーションなどに見られるだろう。

やりっぱなし、言いつぱなしで登壇者が次々と入れ替わっていく。「理路整然」とは程遠い、「融通無碍」な会。だからこそあらゆる生命が響き合い、空間を満たすのだと、会場の片隅でそんなことを感じていた。

ここで14名のプレゼンテーションをすべて紹介することはできない。詳しく知りたい方は『すばる』2020年3月号に管先生の趣意説明をはじめ、登壇者たちによる小論が掲載されているので、そちらをお読みいただきたい。

【ご著書紹介】

『環境から生まれ出る言葉』（水声社、2019年12月）
小谷 一明（新潟県立大学）

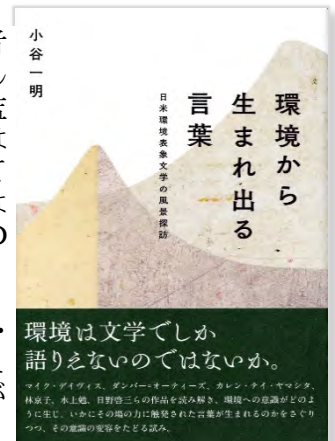
この執筆依頼を頂いたのが、本で書いた「阿賀の追悼集会」（新潟水俣病患者への追悼集会）が催される頃だった。ハナミズキが咲き誇るGWの阿賀野川は格別だ。その中流域に安田と呼ばれる現阿賀野市の村がある。毎年、ここで朝に映画『阿賀に生きる』を鑑賞し、午後からお話や歌、踊りが披露される。県外に出た卒業生も里帰りのように戻ってくる。帰りに皆で川のほとりにたつお地蔵さん（阿賀にゆかりのある水俣川と渡良瀬川の石でつくったお地蔵さん）を訪れ、五頭山のふもとにある釜飯屋で食事をとる。

28年前から続く会だが、今年はコロナ禍により初めて中止となった。しかし、冥途連と呼ばれる若人の熱意で、Webでの開催が急遽、予定日の数日前に決まった。主催者である安田の大工、旗野さんは前夜から酒瓶を手放さず、酩酊しながら秘蔵の写真について紹介していく。集まれないで「つままない」と愚痴をこぼしながら。関西からは歌と舞いが披露され、河川工学の大熊孝先生が河川氾濫の魅力について話す。映画『息の跡』の小森さん・画家の瀬尾さんも顔を出す。水俣の方々も農作業や介護の手を休めて参加するが、初めてのZoomにひっちゃかめっちゃかだ。

『阿賀に生きる』の撮影を機とした自然発生的な集いから、また今年も数冊の本が生まれている。水俣病事件の不思議さは、そこから言葉が生まれ出ること。近年で言えば、新村苑子の2冊の新潟水俣病短編小説集、『律子の舟』と『葦辺の母子』は地元にとって記憶の宝箱だ。しかし、事件を記憶にできない状況が続き、こうした本は玉手箱のように敬遠されるのか、常に入手困難だ。「阿賀の文学」としてまとめられるのはいつのことかと思う。

この会の華は、未認定患者である唄者、渡辺参治さん（103歳）だ。今年は映画監督の石田優子さんが、「唄は百薬の長」であると身を以て示す参治さんの作品（『唄は百薬の長』渡辺参治さん CD レコーディングの記録）

<https://www.youtube.com/watch?v=GU5biDfIk1M>）を製作・配信してくれた。私の本もこうした地元の生業とつながっている気がしている。



【特別寄稿】

A Different Kind of Wilderness

Clea Roberts 氏（カナダ・ユーコン準州在住、詩人）

2019年度全国大会にてポエトリー・リーディングでご講演頂きました、カナダ・ユーコン準州の詩人クレア・ロバーツさんにごエッセイをご寄稿頂きました。滞在中に感じたことなど、彼女ならではの感性がきらめいています。

In 2019, I travelled to Japan from my home in a remote, northern region of Canada known as the Yukon Territory. The Yukon has no big cities, no railway, very limited roads, and any settlements are surrounded by vast, untouched boreal forest wilderness, where you'd be more likely to meet up with a bear or a moose than another human being. The Yukon is almost 30% bigger than Japan but its population a mere 35,000 people.

While the main purpose of my trip to Japan was to tour with the Japanese translation of my nature poetry collection, Here Is Where We Disembark, I scheduled my engagements so that I would have time to visit with my hosts and do some exploring. I have always been intrigued by Japan and wanted to make the most of such a long journey overseas.

While in Tokyo, I presented at the ASLE Japan conference at Daito Bunka University and gave a reading at Tokyo Metropolitan University. In Kyoto, I gave a reading at Kyoto University. I was delighted and inspired by the keen intelligence and dedication of academics and artists I met, the passionate engagement in environment and literature that permeated all events, and the generosity and thoughtfulness of my hosts.

Between my book tour engagements in Tokyo and Kyoto, I travelled to the Kii Peninsula in Wakayama prefecture for a week of walking. I was curious about Japanese forests and wanted to spend some time in the lush and rugged Kumano. I'd heard of shinrin-yoku and liked the idea that one could make a conscious practice of "taking in the forest" or "forest bathing". Knowing the area was renowned for its ancient pilgrimage trails only increased my interest. I am not a religious person, but I am a spiritual one. And I have always thought of nature as the best place to connect with one's heart and soul.

On my first day of walking, I left a nicely appointed visitor's centre overlooking a river, passed through the grounds of an Oji shrine and climbed uphill for a few kilometres, disappearing almost immediately into the

heavily forested mountains. While there had been a few people milling about at the visitor's centre, I saw no one on the trail that day. I wouldn't have minded meeting other pilgrims on the trail, but I admit that it was pleasant to have the forest to myself.

Progress was slow not only because of the terrain, but because of all the unfamiliar flora and fauna I encountered. Broad-leaved evergreen laurel was common along the trail, as was Japanese nutmeg and elm. In these well-established parts of the forest, a dense, low canopy created an intimate atmosphere. In sections of forest that had been logged and replanted, the majestic trunks of cedar and cypress pushed up into the sky, inviting my eyes to follow.

The kuroageha butterfly and the cicadas were my first visitors on the Kumano Kodo. The black kuroageha floated through the air like tiny, storm-ruffled umbrellas. They skimmed silently just over my head as if they were trying to surprise me, then disappeared up the trail or into the depths of the forest. The sound of the cicadas grew to throbbing crescendos that filled every inch of aural space, then dropped unexpectedly into silence before revving up again. As I walked, it seemed appropriate for a pilgrimage that their calls began to sound more and more like questions:

“Why?”

“What about?”

“Please?”

“And then?”



I spent my first night in the Kumano at a sleepy, little mountain village. That evening, I bathed in the minshuku's onsen and donned a yukata for the first time. Dinner was a delicate array of tiny plates filled with expertly prepared local delicacies. It felt soulful to consume food prepared with such care.

After dinner, I sat under a camphor tree to admire the terraced rice fields in the valley below, and then the white mist that drifted into the valley like a curtain, leaving only the peaks of mountains exposed. The mountain tops floated above the mist like waves on an ocean. Well before sunset, the mist rose up and wrapped around the minshuku, obscuring the sky. I marvelled at the whiteness, as if I had been suddenly transported somewhere very different. When it started to rain, the heavy drops tapped softly on the leaves of the camphor tree. Retiring to my room, I fell asleep easily, but woke in the middle of the night to a series of bright flashes that illuminated the rice



paper blinds of the room. It was otherworldly, to experience lightning cut free from its thunder.

Each morning that week, I hoisted my backpack and found the Kumano Kodo trail markers to begin the next leg of the journey. Also helpful were the signs that read “NOT KUMANOKODO” placed at the entrance to any path that split away from the pilgrimage route. Oji shrines, tablets inscribed with poetry and jizo statues also guided me along the trail, always reminding me to take time to pause and reflect.

The exertion of walking in the Kumano was something that felt good and familiar, but being from the Yukon, I was unaccustomed to the heat and humidity. Even while walking the flat portions of the trail, I sweated profusely. I wore what I called my “Kumano Kodo earrings”—drops of perspiration that hung at my earlobes. I daubed my face with a towel that hung around my neck.

Every day I walked up and down mountain ridges, into and out of river valleys. It was like being on a very slow, yet awe-inspiring rollercoaster.

Occasionally, I stopped on the trail and pulled out my notebook to write some lines toward a poem. I noticed that the further I walked, the less I wrote. Sometimes I opened my notebook and poised my pen but didn't write anything at all. It was enough to just soak in the beautiful cacophony of the forest, to have the humid air sit upon the blank page, to wonder at the shape of a strange leaf, to watch a spider twirl in its web. The boundaries of my body began to feel permeable. I was not sure if I was taking in the forest or if it was taking in me. I felt slowed down and softened by the forest and the labour of traveling through it. Each foot step sunk a little deeper in time. I began to experience the Kumano not only as a forested mountain region, but as a state of mind. A different kind of wilderness. The trail itself felt like a series of lush and rugged experiences strung together by my breath.

The month I spent in Japan was a rich experience that impacted me greatly. The Kumano Kodo was one of many remarkable experiences. After Kumano, I went to Nagoya, Kyoto, Lake Biwa, and rode a bicycle between Imabari and Onomichi on the Shimanami Kaido. Toward the end of my time in Japan, I spent a week by the ocean near Kawazu before returning to Tokyo to enjoy some sights and museums that I had missed on my first time through. I am so grateful for the kindness and patience of my hosts and people I met along the way. I came to Japan with a lot of curiosity and quite a few ideas of what it might be like. The truth was much more illuminating and meaningful. Despite all my planning, thinking and reading, nothing could have prepared me for the experience—both in the countryside of Kumano and in the cities. When I returned home, I began to wonder if there was a word for that wonderful feeling of arriving in a place and having one's expectations of it infused with the reality of the place itself. To my knowledge, no such word exists in English, but perhaps it does in Japanese. Or perhaps such a word only exists in the forest air of the Kumano Kodo, hovering silently over a blank page.

Clea Roberts lives in Whitehorse, Yukon Territory. Her poetry is translated by Professor Toshi Takagishi and published by Shichosha Ltd. More information is available at <https://www.clearoberts.com/>

文献情報（2019年11月～2020年5月）

[2019年11月]

- Ilka Kressner, Ana María Mutis, Elizabeth Pettinaroli (Eds.), *Ecofictions, Ecorealities and Slow Violence in Latin America and the Latinx World* (Routledge)
- Robert Sayre, Michael Löwy, *Romantic Anti-capitalism and Nature* (Routledge)

[2019年12月]

- Christopher Schaberg, *Searching for the Anthropocene: A Journey into the Environmental Humanities* (Bloomsbury)

[2020年1月]

- Andrew Kalaidjian, *Exhausted Ecologies: Modernism and Environmental Recovery* (Cambridge UP)
- Gisela Heffes, Lisa Blackmore, *Latin American Environmental Humanities* (Peter Lang)
- 小谷一明『環境から生まれ出る言葉—日米環境表象文学の風景探訪』(水声社)
- フィリップ・デスコラ (著), 小林徹 (訳)『自然と文化を越えて』(水声社)

[2020年2月]

- Anna Grear (Ed.), *Environmental Justice* (Edward Elgar)
- Gregory Lynall, *Imagining Solar Energy: The Power of the Sun in Literature* (Bloomsbury)
- Melody Jue, *Wild Blue Media: Thinking Through*

Seawater (Duke UP)

- パオロ・ダンジェロ (著), 鯖江秀樹 (訳)『風景の哲学—芸術・環境・共同体』(水声社)
- 神崎忠昭, 野元普 (編著)『自然を前にした人間の哲学—古代から近代にかけての12の問いかけ』(慶應義塾大学言語文化研究所)

[2020年3月]

- 高田映介,『世界の瞬間—チェーホフの詩学と進化論』(水声社)

[2020年4月]

- Pieter Vermeulen, *Literature and the Anthropocene* (Routledge)
- 島尾新, 宇野瑞木, 亀田和子 (編)『和漢のコードと自然表象—十六、七世紀の日本を中心に』(勉誠出版)
- 湯本優希『ことばにうつす風景—近代日本の文章表現における美辞麗句集』(水声社)

[2020年5月]

- Anneke Lubkowitz, *Haunted Spaces in Twenty-First Century British Nature Writing* (Walter de Gruyter)
- Susan Watkins, *Contemporary Women's Post-Apocalyptic Fiction* (Palgrave Macmillan)
- 野田研一, 赤坂憲雄 (編),『文学の環境を探る』(玉川大学出版部)

【代表より】

文化的汚染との闘い、あるいは、コロナの時代の環境人文学

ASLE-Japan 代表 結城 正美（青山学院大学）

新型コロナウイルス一色に染まった春だった。5 月に入っても終息する気配はなく、マスク着用、3密回避がすっかり日常化した。外出自粛や遠隔授業はこの先いつまで続くのだろうか。気兼ねなく人と会えたかつての日常がなつかしい。

本学会でも、今年度の活動計画の変更を余儀なくされている。秋に神戸で開催予定だった東アジア環境文学国際大会(ISLE-EA)は延期、全国大会は遠隔会議ツール Zoom による開催の予定である。試行錯誤の年になるが、本学会の設立と発展に多大な功績を残された故・高田賢一先生を偲び、学会として研究交流の機会を絶やすことのないよう対応する決意を新たにしている。会員の皆さまのご理解とご協力をお願いしたい。

* * *

新型コロナウイルス感染拡大に関する報道では、見えない敵との闘いであるとか、病院が戦場と化している、という具合に、軍事的メタファーの濫用が目につく。未知のウイルスへの対応は闘いにはちがいないが、戦争用語には注意が必要だ。軍事的メタファーは、ウイルスという敵の制圧を目的に仕立て上げ、効率重視の風潮を生み、命が軽く扱われることに対する麻痺状態を助長する。スーザン・ソントグが詳らかにしたように、病気のとらえ方は、病理学よりもメタファーによって形成されるのであり、言葉が行動を左右すると言っても過言ではない。

イタリアの作家パオロ・ジョルダナーノの近著『コロナの時代の僕ら』(早川書房、2020 年)も、戦争用語の使用に警鐘を鳴らしている。イタリアに感染が広がり始めた2月末から書き留められた数日間の思索と、コロナ禍の一ヶ月を振り返ったエッセイを収めたこの本で、ジョルダナーノは、新型コロナウイルスとの闘いを戦争に見立てるのは「詐欺」だと断言する。

今度の緊急事態は戦争と同じくらい劇的だが、戦争とは本質的に異なっており、あくまで別物として

対処すべき危機だ。

今、戦争を語るのには、言ってみれば恣意的な言葉選びを利用した詐欺だ。少なくとも僕らにとっては完全に新しい事態を、そう言われれば、こちらもよく知っているような気になってしまうほかのもののせいで誤魔化そうとする詐欺の、新たな手口なのだ。(ジョルダナーノ 102)

ジョルダナーノの懸念は、未曾有の事態が一見なじみのある問題にすり替えられることによる、思考停止の感染拡大に向けられている。フェイクニュースの拡散や、専門家任せの——とはいえ専門家をほとんど信じていない——態度は、思考停止の形態にほかならない。人類史上いくつかの世界的感染流行があり、だからコロナ禍を「少なくとも僕らにとっては完全に新しい事態」だと語るジョルダナーノは、博士課程で素粒子物理学を専攻した科学者の知識と自分の言葉で考え抜く文学者の感性が調和した冷静さと情熱をもって、読者に、考え、記録することを促す。疑問をもち、考えること。なぜ、どのようにして、新型コロナウイルス感染が生じ、瞬く間に拡大したのか。取り戻したい日常とはどういうものなのか。コロナ後にどのような復興を目指すのか。『コロナの時代の僕ら』のように、近視眼的思考の外部に広がる不確実な世界に読者を誘う文学は、目先のことだけを考えがちな社会に対する免疫力を高める滋養である。

文学、歴史、人類学、哲学をはじめとする人文諸科学は、効率至上主義的な軍事的メタファーとの闘いに応じなければならない。個別にはではなく、知を結集して協働する環境人文学というプラットフォームで、言葉の暴力への応じ方について知恵を出し合わなければならない。ここで「知恵」という言葉を用いたのは、ティム・インゴルド『人類学とは何か』(亜紀書房、2020 年)の次の一節を意識してのことである。「知識は武装し、統制する。知恵は武装解除し、降参す

る。知識には挑戦があり、知恵には道があるが、知識の挑戦が解を絞り込んでいくその場で、知恵の道は生のプロセスに対して開かれていく(15)。知識と知恵のどちらかだけでは未曾有の事態に対応することはできない。今求められているのは知恵と調和した知識であり、そのためには、思考を広い時間のなかで深めることが必要である。

目先のことに振り回され、週単位、半期単位、せいぜい年単位でしか物事を考えない現代社会では、広い思考は容易ではない。私が「広い思考」とよぶものは、長期的視野を有するものを指すが、現在から未来に向かう線の時間におけるものではなく、重要な参照点として過去を包含する広さをもつという意味での長期的視野である。そうした思考の広さをもつ人びとを、わたしは石牟礼文学に登場する漁夫やジョン・バージャーの描く農夫に重ね見ているが、ミッシェル・セール『自然契約』(法政大学出版局、1994年)を読み返し、あながち的外れではないという感触を得た。セールは、長期的で広い思考を農民や船乗りに見てとり、近視眼的社会の「行政官やジャーナリストや学者」に對置して、次のように語る。

長期的で最大の広がりをもつ問題の解決策が効果的であるためには、その解決策は少なくともその問題に匹敵する長期的射程をもたねばならない。屋外で、雨や風にさらされて生きていた人々、地域的な経験から発したその行動がやがて悠久の文化をもたらした人々、そのような人々である農民や船乗りは、かつてはもっていたかも知れない発言権をだいぶ以前から失ってしまった。現代のわれわれにとって、発言権は行政官やジャーナリストや学者に割り当てられている。いずれも短期的射程の人間であり、最先端の専門家であり、気候の地球規模の変化に部分的に責任がある人たちだ。それというのも、強力で、効率的で、功利的かつ有害な破壊の手段や道具を発明したり広めたりしたのは彼らであり、現代の権力の短期的視野のなかに埋没し、狭い管轄の縄張り意識にとらわれているがゆえに、彼らは、理にかなった解決策を見出しえないからである。(セール 49-50)

いわゆる環境問題について論じたこの一節に示されている「短期的射程」の思考と「長期的射程」の思考の相違は、新型コロナウイルス問題にも当てはまる。映画『コンテイジョン』のエンディングに示唆されているように、パンデミックのそもそもの原因が環境破壊にあることは誰もが薄々気づいている。セールが生きていれば、今回のウイルス感染の問題を取り上げて『自然契約』増補版を出したのではないだろうか。そう考えたくなるほど、短期的な狭い思考が弥漫している。

短期的思考による長期的思考の抑圧を、セールは「文化的汚染」と名付け、この文化的汚染と闘わない限り環境汚染は解決しないと語る。

物質的、技術的、産業的汚染が、風や雨という意味での時候を何らかの危険にさらしているとするれば、目に見えない第二の汚染があつて、その汚染が、流れ去ってゆく時間の方を危険にさらしている。それは文化的汚染であつて、地球や人間や諸物そのものを護ってきた長期的思考に加えられてきた汚染である。第二の汚染と戦わなければ、われわれは第一の汚染との戦いに破れるであろう。(セール 50)

「地球や人間や諸物そのものを護ってきた長期的思考」を体現する農夫や漁夫への着目をノスタルジーとして一蹴する向きが、環境人文学の一部にみられるが、そのような傾向自体に、短期的思考による支配が感じられる。重要な理論的参照点として、広い思考を実践してきた人びとに着目し、知恵と調和とした知識を探ることが、コロナの時代の環境人文学に切実に求められている。

◆ASLE-Japan 文学・環境学会では、今号より、Newsletter は PDF での発行のみとなりました。バックナンバーは本会 HP (<https://www.asle-japan.org/>) の Publications にてご覧頂けます。会員の皆様には ML を通じて発行のお知らせ等をさせていただきます。お知らせが届かない場合は事務局へ ML の登録をお願い致します。

◆ニューズレター編集委員会では、会員の皆さまからのご寄稿(エッセイ、批評、書評等)、イベント・文献情報を随時募集しています。是非、積極的にご参加ください。

事務局より

■2020年度 ASLE-Japan/文学・環境学会
第2回役員会・総会のご報告

2020年5月24日(日)、オンラインビデオ会議(ZOOM ミーティング)において、第1回役員会が開かれました。まず審議事項として、2019年度会計報告および監査報告、2020年度予算案が提案され、審議の結果、承認されました。また一部役員改選案、全国大会案、会名簿の電子化、2020年 ISLE-EA 延期案が審議を経て、了承されました。ニューズレターの発行、会誌23号の進捗状況、現会員数、院生組織の活動についての報告がありました。

2020年5月30日(土)に、オンラインビデオ会議で例会が行われました。映画『水の記憶 土の記憶』トークセッションでは、この映画企画に関わった方々が登壇され、映画の背景について興味深いエピソードがたくさん語られました。またその後のオンライン懇親会も含め、活発な議論がありました。

全国大会事務局より

■2020年度 ASLE-Japan/文学・環境学会 全国大会のご案内

日時：2020年11月22日(日)

開催場所：Zoom を利用してオンライン開催

大会実行委員：菅井大地(松山大学)

※詳細につきましては、ホームページや各 SNS などでご告知いたします。ご出席いただける方は、いずれお知らせいたします出席登録をお願いいたします。会員の皆様の多数のご出席をお待ちしております。

<会費納入のお願い>

2020年度の年会費(一般5,000円、学生2,000円)の納入をお願いいたします。

ゆうちょ銀行

口座番号 01300-0-93821

加入者名 文学環境学会

(フリガナ：ブンガクカンキョウガクカイ)

※ゆうちょ銀行以外の銀行から振り込みされる場合は以下の情報をご利用ください。

ゆうちょ銀行 一三九(いちさんきゅう)支店

(店番：139) 当座預金口座番号：0093821

<終身会員制度をご活用ください>

「終身会員制度」につきましては、本学会ウェブサイトの入会案内にも掲載しています。現在、9名の先生方が終身会員となっております。是非とも終身会員制度をご活用いただき、本学会に末永くご指導賜りますようお願い申し上げます。

<会員情報の訂正・更新について>

会員の皆様をお願いして参りましたが、連絡先住所、電話番号、メールアドレスに変更がありましたら、すみやかに学会ホームページの該当箇所をご参照いただき、担当役員にご連絡ください。ご協力の程、よろしくお願ひ申し上げます。

ISLE-EA 企画実行委員会より

■2020年東アジア環境文学国際シンポジウム

7th International Symposium on Literature and Environment in East Asia (ISLE-EA)

「2020年東アジア環境文学国際シンポジウム(ISLE-EA) 開催延期のお知らせ」

2020年11月21日(土)と11月22日(日)に甲南大学で開催を予定しておりました2020年度 ISLE-EA は、来年度に延期することとなりました。50名を超える出席者が予想され、今後の感染状況、海外の感染状況の把握が難しいなか、感染防止の観点から大学のキャンパスを使用した開催は難しいと判断した次第です。

なお、来年度の開催方法および日程等につきましては、検討を重ねてはおりますが、まだ確定できない状況でございます。新たな情報が届き次第、随時、お知らせしてまいります。どうぞ宜しくお願い致します。

ISLE-EA 国際シンポ企画実行委員：小谷一明

広報より

広報では、会員の皆様からお寄せいただいたご活躍の情報を学会のウェブサイトに掲載しております。アドレスは以下のとおりです。

<http://www.asle-japan.org/publications/> 会員による出版物/

今後も定期的に情報の更新をしてゆきますので、皆様のご出版やご活動等の情報を広報委員の塚田幸光

(hiro2827@gmail.com) までお送り下さい。次回の更新は2020年11月ごろを予定いたしておりますが、情報のご連絡はいつでもお待ちしております。

ASLE-J 広報委員 喜納育江、塚田幸光、松永京子

会誌編集委員会より

『文学と環境』投稿における引用・参照と引用文献の書式について、e-book やオンライン・ジャーナルの参照例を加えるなど更新しました。加筆・修正点については、学会ウェブサイトにてご確認ください。

..... 編集後記

半年前、突然、日常が失われた。全世界で50万人の死者。地球規模での生命維持への危機感は、巷間に流布する「新しい生活」には含まれていないかのようにみえる。全生命への価値観の変化こそ求められているはずなのに。人間界の騒ぎをよそに、自然の巡りはいつもの季節を連れてくる。本年は例会もオンラインで行い、全国大会もオンラインとなる予定である。自粛し孤立した生活の中で、オンラインとはいえど会員の皆さんと顔を見ながら話したことは久しぶりの感謝となった。新しい形のニューズレターも、失われた日常には追いつかないが、会員の皆さんに少しでも変わらぬ巡りを与えるものでありたいと思う。(Y)

【発行】代表 結城正美(青山学院大学)

事務局 辻和彦(近畿大学)

〒577-8502 大阪府東大阪市小若江3-4-1

Tel/Fax: 06-6721-2332(内線3400)

E-mail: twain1910★gmail.com

【編集】編集代表 澤田由紀子(甲南大学・非)

(Eメール送信の際には、★を@に置き換えて送信して下さい)